

人は死ななくても死ぬ：病める者たち、病める文化、「病める薔薇」

Greatchain

2018/06/14

「人は死んでも死なない」という本を書かれた東大（医学部）教授がおられる。この逆も真である——人は死ななくても死ぬ。「脳死」というものがあるなら「魂死」というものがあり、それを認めるべきである。「魂」というものを認めない、我々の唯物論文化のために、我々の社会の進歩がどれだけ遅れたか知れない。「人は死ななくても死ぬ」というのは、聖書の根本にあるテーマである。聖書などを持ち出すと、にわかにならざるを得ない。「科学者」は、今でもいくらでもいるだろう。そういう人こそ、学界-メディア共同体によってつくられた、底意をもつ唯物論文化の犠牲者である。アイゼンハワー大統領は、その退任演説で、軍-産複合企業がのさばるようになった、注意せよ、と忠告して辞めていった。その通りになった。我々の唯物論文化も、今、詰め腹を切られるように退き、かつてのまともな世界観を認めざるを得なくなった。この我々のサイトで、「レディ・ガガが魂を悪魔に売った」告白の記事が、特に多くの「いいね」の支持を受けているのも、その一つの表れだろう。

人を殺さないで殺す、つまり魂を腐らせて殺すのが、サタンの狙いである。というより、そのような殺し方でなければ、彼らにとってはあまり意味がない。人間を、本来の神の創造の意図からかけ離れたものに、作り替えてこそ意味がある。そのときに彼らの「新世界秩序」は完成したと言える。そのためにこそ、彼らは、あれほど人間を「いじる」ことに執着する。

「MK ウルトラ」と言われるようなマインドコントロールを、特に子供に対して用いて、人間の正体をなくさせること、ワクチン戦略などでも、特に自閉症のような異常児を作ることによって、人間を破壊することを、彼らは狙っている。この、かつての共産党の戦略でもあった「人間改造」こそ、彼らの狙いであり、神に対する復讐である。そういう人間改造の暴力（実験）は、イルミナティ社会の内部でも行われているらしく、彼らが決して我々よりも幸福なわけではない。

人間の魂を奪い、腐敗させ、死に至らしめる最も有効な方法は、セックスを用いることである。これはプーチン大統領が、特に強調して、ペドフィリアを「ノーマル化」しようとするのが西側エリートの戦略だと、警告している通りである。最初、ペドフィリアという人間最

大の犯罪が「文化」だと言われたとき（英女性政治家が最初か？）、我々は途方もないことだと思った。しかし、時間がたって、次第に事情がわかってくると、なるほどこれは、「彼ら」からすれば、確かに「文化」に違いないことがわかってきた。この人間最大の極悪犯罪が、徐々に、我々の意識や良心を麻痺させ、犯罪を犯罪と思わせないところまで誘導していくのが、彼らの狙いである。そうなったとき、彼らの長年の計画は勝利に終わる。彼らは勝鬨をあげるだろう——やった、人間を神から奪ったぞ！ 我々はそのとき、生物学的には生きているが、実は死んでいる。あのデンバー国際空港の壁画の人物のように、また、リチャード・ドーキンズの「見事なまがいもの」（『神は妄想である』p.121）のように死んでいる。

人間の到達するこの事態を、直観していたと思われる文学作品がいくつかある。18世紀から19世紀にかけて生きた、預言者的な英詩人ウィリアム・ブレイクの、有名な短詩「病める薔薇」The Sick Rose は、特に驚嘆すべきものに思える。これは翻訳で十分理解できるだろう：——

おお薔薇よ、お前は病んでいる／夜の、吼えたける／嵐の中を飛ぶ／あの目に見えぬ虫が／真っ赤な喜びの／お前の臥所を見出した／そして彼の暗い、秘密の愛が／お前のいのちを滅ぼす

この虫は目に見えないのだから、霊的存在であり、悪意をもつサタンのようなものである。そしてこの詩の意味は、この存在が、人間を間違った犯罪的セックスに導き、人間を滅ぼそうとしている、ということのように読める。「真っ赤な喜びのお前の臥所」というのは、性の行為に違いない。しかし、この誘惑者が「夜の吼えたける嵐の中を飛ぶ」のだから、猛烈な悪のたくらみを持つ者のようであり、「彼の暗い秘密の愛」は、隠れてする犯罪的セックスを意味するようである。しかし、その結果が、死ぬほどの重い結果を伴うのは、神とのつながりが切れるほどのことであって、単なる肉体の死ではないだろう。

文化としてのペドフィリアという現実遭遇した後で、この詩を読み直してみると、どうしても、そのように読まざるを得なくなる。今起きていることは、時たま新聞に載る、“変質者”の異常犯罪といったものとは、全く違ったものである。そもそも、そのようなものが、ブレイクであろうと誰であろうと、詩の材料になることはない。

「夜の闇の中を飛ぶ見えない虫」はまた、インターネットやその暗号を利用する、ペドファイルたちの悪の現実を、指しているようにもみえる。「暗い秘密」とは、ケネディが、国家にそんなものがあってはならないと言って暗殺された、世界を支配する秘密結社のようなものもある。

ペドファイルという異常者は、まさに「病む者たち」であり、そのように呼ぶ人たちが多い——those sick people というように。彼らが集団を作って組織的に存在しようと、単独で大量に存在しようと、この現象は「病的」であり、「夜の吼えたける嵐の中を飛ぶ見えない虫」とは、サタンという悪性ウィルスの世界的蔓延とも、いくつもの実例によって説明したように、世界的憑依としても考えることができる。

The Sick Rose
By William Blake (1757-1827)

O Rose, thou art sick!
The invisible worm
That flies in the night
In the howling storm,

Has found out thy bed
Of crimson joy,
And his dark, secret love
Does thy life destroy.